【10】本研究の原始仏教聖典観とその取り扱い方

［1］上述してきたように本研究は原始仏教聖典を主な資料とする。原始聖典資料にはパーリ聖典と漢訳聖典のほか、チベット、サンスクリット、その他の言語で書かれた聖典が残されている。また漢訳聖典については組織的なものの他に多くの単訳経が存する。しかし本研究の基本資料として組織的にデータ入力したのは【資料２】に示したようにパーリの経蔵・律蔵と漢訳の５つの阿含経（別訳雑阿含経を含む）と５つの広律であり、他の資料は参考資料、副次資料として扱うに止める（ただし漢訳・サンスクリットの「大般涅槃経」は貴重な「仏伝資料」として例外的に扱った）。

このような方針を取ったのは以下の理由による。

［1－1］前述してきたように、我々の当面の研究課題は原始仏教聖典の編集者たちがもっていたであろう「釈尊の生涯」と「教団形成史」の＜イメージ＞を再構築することにある。そのためにはある程度の纏まりが必要である。

例えばある原始仏教聖典群が釈尊の出家は１９歳であるという＜イメージ＞のもとに編集されているとするなら、苦行年数も、成道年齢もそれとは矛盾しない形で伝承が形成されたはずである。それは２９歳というイメージで作られた原始聖典群とは、微妙なところで差異をもたらすにちがいなかろう。ここにさらに２５歳とする断片的資料が入り込んでは、（たといそれが結果的に貴重な歴史的事実を伝えるものであったと判明したとしても）、いたずらに混乱を助長させる恐れが生じる。

換言すれば釈尊の生涯全般にわたるあるまとまりのあるイメージをもとにしなければ、われわれの作業は成り立たないわけであって、そのためにはある程度纏まった分量の原始聖典群を必要とするということである。

［1－2］しかし断片的な資料をも参考資料、副次資料として扱うというのは、もしこれら単経や断簡が組織的な原始聖典の持つ情報と重なり、矛盾しないなら、あるいはたといそれが組織的な経典群の中に含まれていない独自の情報であった場合でも、組織的な＜イメージ＞を作り上げるために合理的に利用できるなら、それらをも利用するということを意味する。また将来的な展望のなかにある「歴史的釈尊伝」と「最古の釈尊伝伝承」を探求する際には、当然利用しなければならないからである。

［2］以上のように本研究の目的は、組織的な原始仏教聖典群の編集者たちのもっていた＜釈尊の生涯イメージ＞と＜釈尊教団形成史イメージ＞を再構築することにあるが、この組織的な原始仏教聖典群の編集者グループはけっして１つではない。現在のところその伝承部派は次のように考えられている。

［2-1］

Dīgha Nikāya（DN.）＝南方上座部	長阿含経＝法蔵部
Majjhima Nikāya（MN.）＝南方上座部	中阿含経＝説一切有部
Saṃyutta Nikāya（SN.）＝南方上座部	雑阿含経＝説一切有部
	別訳雑阿含経＝？
Aṅguttara Nikāya（AN.）＝南方上座部	増一阿含経＝大衆部

Khuddaka Nikāya（KN.）＝南方上座部
Vinaya＝南方上座部　　四分律＝法蔵部
五分律＝化地部
十誦律＝説一切有部
僧祇律＝大衆部
根本説一切有部律＝根本説一切有部

これらはごく大ざっぱに系統をくくったものであって、パーリ聖典群を別にすれば、例えば「長阿含経」と「四分律」がともに法蔵部の所伝と考えられはしてもそれらが１つの編集者グループによって編集されたとまでは考えるべきではないであろう。説一切有部の伝承とされる中阿含と雑阿含にしても、その系統が微妙に異なることはすでに知られている(1)。したがって原始仏教聖典の編集者グループはパーリ聖典の編集者グループと、漢訳経蔵５つの編集者グループ、漢訳律蔵５つの編集者グループの合計１１の編集者グループを想定しなければならないということになる。（この他にチベット訳の律蔵があるが、その翻訳研究が進んでいない現在ではそれらを資料として収集することができなかった。多くの部分においては『根本説一切有部律』に近いものと想像している）

（1）森　章司「新・旧『婆沙論』の引用経について」（『印度学仏教学研究』21－2　1973.3）p.374以下参照

［2－2］もちろんこれら１１の編集者グループが単一の＜イメージ＞をもっていたとするなら、これらを分ける必要もなく、１つとして考えれば足りるのであるが、おそらくそれは期待できない。そこで各グループの伝承が異なっていた場合にはどう処理をするかという態度をあらかじめ決めておかなければならない。

ということになればもっとも大量に組織的な経典群を伝えるパーリ聖典を第１に尊重しなければならないのは当然であろう。したがって我々の当面の課題は、パーリ聖典の編集者たちがもっていたであろう＜釈尊の生涯イメージ＞と＜釈尊教団形成史イメージ＞を再構築するということになる。

しかしそれだけならパーリ聖典のみを材料とすることで十分であり、漢訳の諸聖典を資料とする必要はないということになる。

しかしながらパーリ聖典には含まれない情報が漢訳諸聖典に含まれている可能性もないではなく、もしそれらがパーリ聖典の＜イメージ＞と齟齬を来さず、さらにはパーリ聖典の＜イメージ＞を合理的に補強することができるならそれも使用すべきであろう。原始仏教聖典が抜け落ちるものもなく、付け足すものもなく完全に伝えられてきたとするなら、漢巴において相違をきたすはずはないのであるから、パーリ聖典であろうと、欠落した部分もあることは当然ながら予測されるからである。

また我々は現時点では致し方がないので、当面の目標を「原始仏教聖典の編集者たちの＜イメージ＞」から「パーリ聖典の編集者たちの＜イメージ＞」に引き下げたのであって、その背後には「歴史的釈尊の実像と釈尊教団の形成史」や「原始仏教聖典の編集者たちの＜イメージ＞の原像」を追及することを放棄しているわけではない、ということを述べれば十分であろう。

［3］上記のような理由から、われわれは原始仏教聖典資料を含め各種資料を以下のように「第１次水準資料」から「第５次水準資料」までの５段階に格付けして用いる。

［3－1］「第１次水準資料」はパ・漢共通する資料である。すなわちパーリ聖典の編集者たちが持っていた＜イメージ＞と、漢訳聖典の編集者たちがもっていた＜イメージ＞が重なる資料である。われわれは先にも書いたように、現時点で「歴史的」あるいは「原初的」な「釈尊伝」を再構築するということを志してはいないが、当面はそれを留保しているだけのことである。このパーリ・漢訳共通の資料は、この留保事項を解決してくれるためのもっとも有力な材料を提供してくれるであろう。

ただし漢訳聖典の編集者グループは上述のように細かく分ければ１０に分れる。そのすべてとパーリ聖典資料が共通する情報が真の意味の漢巴共通資料であるが、必ずしも同一記事が１０すべてに記されているとは限らない。経蔵と律蔵とは編集意図が異なり、長阿含経と雑阿含経の間でも異なるはずであるから、そういうことは往々に起りうるであろう。

また同じ事項の記事が１０のすべてに見いだされるとしても、その中のいくつかにおいては情報に異なりがあるかもしれない。もちろん真の意味での「パ・漢共通資料」はすべての資料が例外なく一致するものとすべきであるが、もしそういう方針を取るとすると、１０ある情報の中の１つが不合理で、採用する価値の乏しい場合であってもそれを無視できず、「第１次水準」とすることが困難になってしまう場合も生じるであろう。

例えば釈尊は８０歳で入滅されたとする記事が９つのグループの聖典に見られるのに、１つは７９歳で入滅されたとするなどというような場合であって、こういう場合にも一応は検討はしなければならないであろうが、もしそれが採用する価値がないものと判断できれば、それを捨ててこれも「第１次水準資料」と見なすべきであろう。

このように「パ・漢共通資料」といってもそう単純であるわけではなく、その都度詳細に検討しなければならないが、ここではとりあえずの目安として、漢訳聖典のグループの中で過半数がパーリ聖典と共通する記事を「第１次水準資料」と位置づけておく。

なおこの「第１次水準資料」は「漢巴相応経」をいうのではなく、全く別の経典であっても、例えば釈尊の入滅を８０歳とするものは等しくすべて「共通資料」と見なすのであるが、しかし多くの場合は「漢巴相応経」に見いだされる。そこで本研究ではデータ入力にあたり「漢巴対応経」を対応させるように配慮した。本「モノグラフ・シリーズ」に各種の「資料集」を掲載する予定であるが、可能なかぎり「漢巴」を対応させた形で示すように努力する。

その際「経蔵」に関しては赤沼智善著の『漢巴四部四阿含互照録』を、「律蔵」の経分別については「南伝大蔵経」の第５巻付録の諸律対照表を参照させていただいた。記して謝意を呈したい。しかし本作業中に修正した部分も少なくないし、「律蔵」の犍度分や「比丘尼経分別」などは新たに我々が対照表を作成した。

［3－2］「第２次水準資料」はパーリ聖典資料で漢訳資料とは共通しないもの、すなわちパーリ聖典のみが伝える資料である。先述したようにパーリ聖典はもっとも整った形で大量の情報を伝え、＜釈尊伝イメージ＞＜釈尊教団形成史イメージ＞を再構築するためにもっとも都合がよいからである。

［3－3］「第３次水準資料」はパーリとは共通しない、漢訳聖典独自資料である。もしこ

れらがパーリ資料の欠けたところを補い、しかもそれがパーリの＜イメージ＞と矛盾しないなら、これらも積極的に利用する。

しかし中にはパーリの＜イメージ＞と齟齬を来す場合もないではないであろう。その場合はもちろん「第２次水準資料」としてのパーリ聖典を優先使用し、この「第３次水準資料」は採用しないが、そのようなものはできるだけ注記するように努める。今後客観的・歴史的「釈尊伝」を作る際の参考資料となりうるからである。

［3－4］「第４次水準資料」は上記聖典に付されたアッタカターや、後の時代に成立した「仏伝経典」などの古伝承である。特にパーリのアッタカターは「歴史的事実」を伝える可能性はぐんと落ちるけれども、パーリ聖典と矛盾しないように注釈されているはずであり、パーリ聖典の持っていた＜釈尊イメージ＞を補強してくれることが期待される。それは伝説・神話に彩られている可能性なきにしもあらずであるが、しかしわれわれが現時点で想像をたくましくするよりは、よほど原始仏教聖典が編集されたときの＜釈尊イメージ＞に近いであろう。

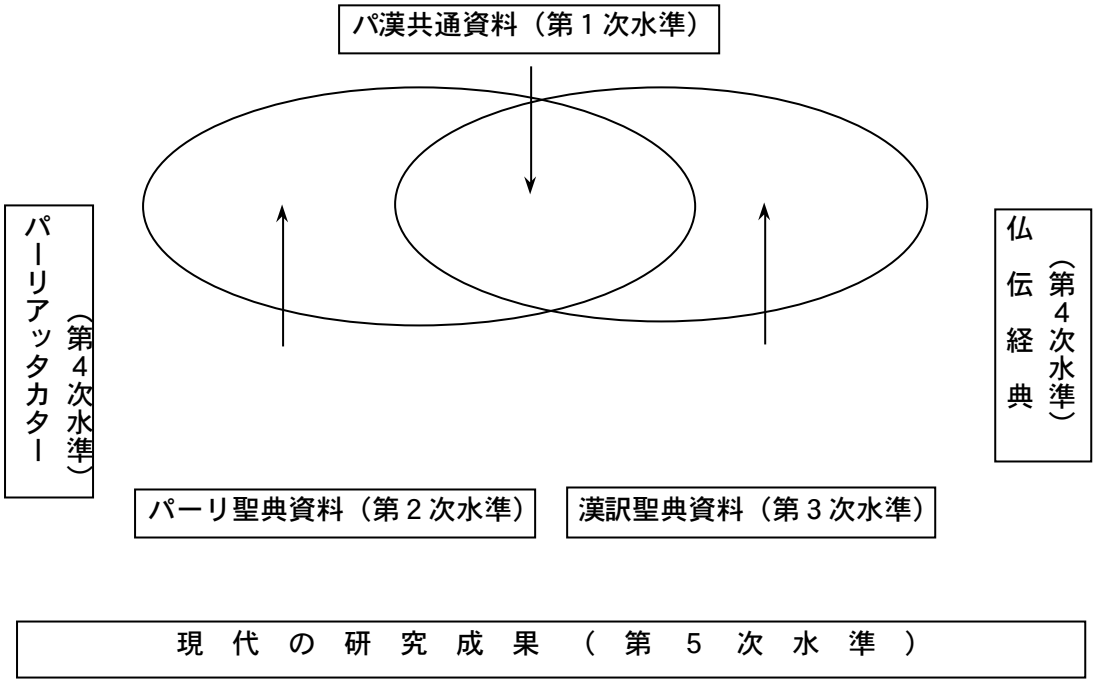
また「仏伝経典」も原始聖典を基本資料として作られた今から１５００年以上も前の古伝承であるから、われわれの想像よりはより原始聖典の編集者たちの＜イメージ＞に近いであろう。したがってこのようなもので、パーリ聖典資料と矛盾しない資料を「第４次水準資料」として利用する。もちろん矛盾して、本研究が目指す釈尊の生涯の再構築に利用できない資料については、前項と同じく注記して、都合の良い、恣意的な利用の仕方に終わらないように努めることはもちろんである。

［3－5］そして「第５次水準資料」として、現代の研究成果を利用させていただく。もちろんこれらが使用している原始聖典資料はより上位の水準であるから、ここにいう現代の研究成果というのは、現代の研究者の見解・意見という意味である。

ただしその多くは「歴史的事実」「原初的イメージ」が尊重されていて、われわれの研究姿勢とは異なる部分もあり、結論において矛盾することは大いに予測されうる。したがってその利用は臨機応変にならざるをえないことは言うまでもない。

［3－6］もちろん以上のように資料水準を５段階に分けるのは、もし上位の水準資料と下位の水準資料とが矛盾する場合には、下位資料を捨て上位資料を採用するためであるが、また史実を考えるよすがともしたいからである。

［4］以上を図示すると次のようになる。


パ漢共通資料（第１次水準）
パーリアッタカター（第４次水準）
仏伝経典（第４次水準）
パーリ聖典資料（第２次水準）
漢訳聖典資料（第３次水準）
現代の研究成果（第５次水準）